

# 平成27年度 練馬区立八坂小学校 経営計画

平成27年4月3日  
校長 稲葉孝之

## 1 学校経営の基本的な考え方

### (1) 生涯学習の目標

生涯学習の目標を「人間味あふれ、自ら考え、自ら判断し、自ら選択し、自ら行動し、自ら修正し、自ら責任をとることができる」と考える。その基礎となる小学校段階での教育のあり方を探っていきたい。生涯にわたっての人生の基礎基本であるから、小学校の期間に目標を完全に達成することではない。子供が社会で生活する時に、培ったものが少しでも活かされていくことを願って教育にあたることと考える。

そのために学校は、「人間味あふれる」環境と「自ら考え～自ら責任をとることができる」環境をつくり、その中で教育活動を進めることである。この二つの環境の必要性は、「人間は知的好奇心のかたまりである」という観点から出発していきたい。幼児期に見られる知的好奇心が生育する環境の中で、その好奇心が失われることがなければ、小学校における生涯学習の目標は達成できると考える。

しかし、入学時の子供の様子から見ても、従属的な行動をとる子供が多く目に付く。これは、小学校入学前に、行動規制が多くて知的好奇心を発揮する経験が少なかったか、知的好奇心を発揮した後、学ぶ経験が少なかったと考えられる。はじめから多くの行動規制があると、主体的な行動をとることができない。行動した後に規制は作られると考える。したがって小学校では、基本的な行動規制の他は、行動した後に共通理解を図りながらルールを作っていくことが大切である。

### (2) 教育のとらえ方

用語としての「教育」は、「教え育てる」ではなく、「教える」ことと「育てる」ことを区別して、双方のバランスをとりながら指導することと考える。「教える」場面は少なければ少ない方がよい。しかし、既習の経験では理解できないことは「教え」なくてはならない。「育てる」には時間がかかる。子供の意欲を高め、自分でやったという感覚を大切にしたい指導を進めたい。

間違いを恐れる子供は、安心感のある環境の中で変容することができる。それは、「まちがいの中に宝がある」ことを知る人間味あふれる教師が作り出す環境である。したがって、教師もまず「為して学ぶ」姿勢を確立していくことが大切である。

教育と学習の基盤は次のように考える。

- ☆教育の基盤は、信頼に支えられた人間関係
- ☆学習の基本は、学習者の学習意欲
- ☆教育の評価は、長いスパンの変容



## 2 目指す学校像

学校は夢をかりたて、希望を育てる場所でありたい。それは、明日の登校や出勤を楽しみにする子供や教師があふれ、一度来校した方が再度の来校を楽しみするような学校だと考える。

そのためには、学校の物的環境と人的環境の特徴を生かす教育の実践を行っていく。学級担任の意識を越えて学年担任の意識で子供の教育活動に当たっていききたい。合言葉は、「笑顔かがやく八坂の子」「みんなで育てる八坂の子」とする。

学校の教育目標は、「よく考える子」「心ゆたかな子」「たくましい子」とし、目標を細分化してそれぞれの学年や学級及び個人の具体的な指導の指針としていく。なお、「気持ちの良い挨拶をする」は学校生活の基本をして考え、全ての子供の目標としていく。

## 3 学校経営の基本方針

### (1) 学校経営の判断基準

「はじめに子供ありき」の観点に立って判断していく。

#### ☆子供にとってよいか？

教育活動を行うことによって、子供に成果が上がって欲しい。そのためには、活動のねらいを明確にするとともに、安全に関する配慮と他に迷惑を及ぼさない配慮をしていく。特に活動するのであるから、事故が起きる可能性はある。学習指導を行う時、「予想される子供の反応」をできる限り考え、それに対する手立てを考えてから指導する。

しかし、実際の指導の場面では、予想しない反応が出ることもある。事故に対する配慮もこれと同じである。事故防止の配慮を周到に行った上で、教育活動を実践していきたい。事故を恐れて教育活動を萎縮させることのないようにしていきたい。

#### ☆職員、保護者、地域の方々にとってよいか？

子供を育てる指導者は、職員、保護者、地域の方々である。

主体的な子供を育てるためには、指導者も主体的な行動がとれなくてはならないと考える。指導者にとって良いと思われることは、積極的に取り入れていきたい。ただし、「やらされている」という意識があるうちは、主体的な行動とはいえないので、「自分でやる」という環境設定に努力していく。



### (2) 指導するときの判断基準

人それぞれ個性があるのだから、教育観も人の数だけいろいろあると思われる。その中で、子供のいろいろな欲求に対応していくのである。子供に自分らしさをもたせるには、子供のもっている欲求を満足させていくことである。この欲求は好き勝手にさせることではない。子供の「欲求」を受け止めながら、「規範」を指導していくことが大切である。

子供は、「欲求」と「規範」が葛藤して折り合い、「我慢」が身に付いてくると考える。具体的な場面で、基本的なルールを逸脱したとき納得させていくことである。

そこに規範意識が生まれてくる。子供の指導を進めるときの条件としては、ルールを少なくしておくことである。しかし、すごい速さで廊下を走る子供がいたとき、それぞれの注意の仕方はいろいろあると思うが、注意する人としらない人がいたのでは、子供に不信感を育てることにもなりかねない。そこで、指導するときの基準として、以下のようなときは、全員で指導にあたるようにしていきたい。

- ★生命にかかわるとき [生命尊重の立場]
- ★人権にかかわるとき [人権尊重の立場]
- ★人に迷惑をかけたとき [社会性を育てる立場]
- ★既習経験のないとき [学び方を育てる立場]



人によっては、この他にも観点があると思われるが、各学級・学年においても、事例ごとに指導の観点を子供にはっきり伝える努力をして欲しい。その後、細かいルールを共通理解していけばよいと考える。「**為して学ぶ**」姿勢は貫いていきたい。

### (3) 学校経営の評価

学校運営の評価は『子供』に置く。評価基準は学校経営の判断基準に基づいていく。したがって、教育指導の評価は「子供が変容した姿」で考えたい。百の理論よりも一つの実践に勝るものはないと考える。今、学校には説明責任が求められている。教育活動においてみると、「結果責任」と「経過責任」がある。そのどちらについても、説明責任を求める相手が納得するデータを示していくことである。現在の子供の実態を把握し、その変容を示すことで、理解を得られる。したがって、為して学ぶ姿勢を貫いていきたい。為して学ぶ姿は、子供も指導者も同じである。私たちが自らその生き方を子供に示していくことが、子供の変容につながると考える。

### (4) 個性・能力に応じた教育を進める

「教育は子供理解に始まり、子供理解に終わる」と言われる。一人一人のプロセスに合った指導を進めることは難しいかもしれないが、一人一人を理解しようと努力することはできる。また、人の心を十分理解することはできなくても、その人の心に共感することはできる。この中で、人と人の信頼関係は生まれてくると信じている。そのためには、加点的な見方も大切な要素であると考えます。

### (5) 専門職としての誇りをもつ教師一人一人を信ずる

専門職としての教師は、幅広い指導理念と高い指導技術をもっている。本校の研究と修養を切磋琢磨する一人一人を信じて教育活動に当たっていきたい。

## ①教師は子供を育てる力をもっている

### ・子供を見つめる目

ある子供は、毎日遅れて登校する。学習が始まっている教室へドアを大きな音を立てて開け、「おはよう」と大きな声を出して入ってくる。担任は「何て自分勝手な子だ」と思った。学年会で、ある教師が「確かに行動は粗野だが、彼是不登校傾向である。ドアを開けるとき、自分に言い聞かせて入ってくるのではないか？」と発言した。

### ・子供を感じる心

ある担任が「まだ」「もう」を使って短文を書かせた。[まだいは、たかい] [もうと牛はないた] という文があった。担任はまず花丸を付け、文の着想をほめてから、この問題に対する指導のコメントを書いた。

### ・子供を育てる技

ある担任は、子供の発言の後で短いコメントを入れる。「よく聞いていたから、〇〇君の言ったことと違うところに気が付いたんだね。」「あっ、〇〇さんの考えの付け加えだね。」「〇〇君の考えと同じだけど、説明の仕方が違うんだね。」などのコメントをしているうちに、子供が発言する際、「付け加えです。」「違う考えです。」という発言が出始めた。

## ②ほめる観点と叱る観点

人はほめられると嬉しいものである。しかし、ほめてばかりもいられず、叱ることもある。感情のおもむくままに、ほめたり、叱ったりしては相手の不信感を育てることにもなりかねない。相手の悪いところ、嫌なところはすぐに目に付くが、良いところは見つけにくい。ほめる観点、叱る観点を明確にして、ほめ上手、叱り上手になるように努力していきたい。叱っても怒ってはならない。「怒る」は感情的な指導である。

<u>・ほめる観点</u>	本人なりに努力しているとき	人のために尽くしているとき
	自分なりの発想をしているとき	自分なりに実行しているとき

### ※ I (私) メッセージでほめる

<u>・叱る観点</u>	生命尊重にかかわるとき	人権尊重にかかわるとき
	社会性にかかわるとき	

## ③期待する子供の姿

期待する子供の姿は、人間の幅につながるものである。

期待する子供の姿は、時として大人から見ると生意気に思えることがある。「自ら考える」力をもっているのであるから、礼儀・習慣に疑問をもつこともあるだろうし、建設的な批判をすることもあろう。決して大人の言うとおりに動く子供がよい子供ではない。時には、腹が立つこともあるだろうが、腹を立てているうちは、大人自身がまだ育てていない証拠でもある。その様子を見つめる目、感じる心、育てる技を身に付けていってほしいと思う。

- 1 好きなもの、得意なものがいくつもある。
- 2 好奇心に満ちあふれている。
- 3 自分のよさに気付いている。
- 4 相手の存在を認められる。
- 5 精力的である。
- 6 人の話を受け入れないこともある。
- 7 一つの問題に集中する。
- 8 根気強い。
- 9 徹底的に物事を行う。
- 10 決して退屈しない。
- 11 妥協せず自己主張することもある。
- 12 冒険好きである。
- 13 無秩序にひかれることもある。
- 14 ある結果を達成しようとするとき、自分に厳しく、一方でおおらかな気持ちをもっている。
- 15 礼儀等の習慣に疑問をもつことがある。
- 16 人に対する基本的な信頼感をもち、人を受け入れることができる。
- 17 情緒が安定している。
- 18 建設的な批判をすることもある。

#### ④期待する教師の姿

専門職として、人間的ふれあいに根ざした子供理解を進めていく。

##### ア 子供の心を敏感に察しようとする

人がフラストレーションを抱えると表情や行動に表れる。毎日全員に声をかける、何人かずつ毎日話を聞くと言うことはよいことであるが難しい。助けを求めている子供をいかに早く発見し、助言援助するのは、日頃の表情や行動が違っている子供を見つけることである。教師からの「おはよう」の一声からも発見することはできる。

##### イ 子供を柔軟な見方で見ようとする

自分が育ってきた環境でものの見方、考え方をする。自分の感覚だけで判断しようとするとう理解できないことが多い。人様々なのだから、いろいろな感覚があることを認めることから出発することである。そして、どのように考えているのか理解しようすれば見えてくることもある。

##### ウ 子供と焦らず接しようとする

子供を見つめ、詰まってしまうたら視点を変えることである。視点を変えられないと焦ってくる。人間は焦るとつい、責任を転嫁する。自分の置かれている状況によって、人の行動が変わってくる。焦っては良い結果は出ない。

## エ 子供に期待をもってかかわろうとする

学習指導場面で、切り札になる発言を先に言わせないことを見かける。まずできない考えから発表させる。そして最後に切り札を言わせる。それが教師の思惑通りだと、「よくできた。」と思う。切り札が思い通りの答えでないと、教師が代わってしゃべってしまう。このパターンを繰り返すと、子供はひいきしていると捉える。

## オ 子供を素直に見ようとする

職員室に休み時間の度に顔を出す子がいた。「こりゃ困ったな」と思って話をしていたら、帰ってしまった。問題を抱えた子供ほど、相手に敏感である。翌日から指導しようという態度は見せずに、子供の話に耳を傾けた。三週間ほど経った頃、同じ話をするようになったので、指導を始めた。「だめだ」ではなく、「今はだめな状態にある」という心で子供を見ることである。

## カ 子供に温かい関心をもとうとする

これは加点法の本質である。子供に温かいシャワーと冷たいシャワーをかけてあげることである。どちらか一方ではだめなのである。階段の手すりを滑っている子供がいる。「危ない、やめなさい」（冷たい言葉）と教師が言ったら、それだけでなく、次の機会に同じ子供が手すりを滑っていなかったら、「今日は滑っていないね。えらい！」（温かい言葉）をかけていくことが子供を育てる出発になると思う。

## キ 子供と共に歩もうとする

学習指導中、「えっ、こんなこと考えていたのか」「そんなことを悩んでいたのか」と発見することがある。教師の考える段階通りに子供は考えない。子供の考えや思いが理解できたとき、子供から学んだと言える。子供に学ばせるためには、教師も子供から学ぶ姿勢が必要である。

## ク 子供一人一人の身になってみようとする

「やる気がない」ときは、大人も子供も同じである。頭痛のひどいときはやる気はない。子供も便秘、睡眠不足、家庭の問題などでやる気がないときがある。しかし、ちょっとした努力で到達できそうだとやる気が出る。やる気が出るように配慮していくことも大切である。また、教師からやる気がないように見える場合でも、本人のやる気があっても、ものを創り出すイメージが湧かないのかもしれない。思いはかることである。

## ケ 子供の良いモデルになろうとする

担任が右下がりの字を書くと、子供も右下がりの字を書くようになる。「横断歩道で、点滅信号になったら危ないので渡ってはいけない」と学校では指導する。しかし、親によっては、「早く渡りなさい」という場合がある。モデルが一貫しないと子供は必ず悪いモデルを選択する。教師は子供にとって良いモデルになることである。

## コ 子供に厳しく接しようとする

人間関係のないところでは、厳しく接しても子供はやらない。叱る機会があったとき、叱責の言葉が先に用意されている子供は、決してその言葉を受け取らない。

(6) 実践の中から共通理解を図る

教育活動は、教育目標の具現化のために実施される。教育目標達成のために機能的、組織的な活動を推進していきたい。実践のための配慮したい要素は、次の通りである。

・教育活動は計画的・意図的に行う

教育は意図され、計画的なものである。事前の準備や安全などに対する配慮は、しすぎてしすぎることはない。

・点から線、面での評価を行う

点は今ある状況であり、一つの結果でもある。一つの状況で評価することは一面的で当たっていない場合もある。線での評価は、一つ一つの状況を継続的に観察して評価することである。継続観察の中に変容が見えてくることが多い。また面での評価は、一つの線だけでなく、異なった観点からも計測して観察しながら評価することである。すぐに「こうだ!」と決めつけしないで、評価することが大切だと考える。

・学級担任から学年担任意識へ

前述の「みんなで育てる八坂の子」の発想である。専科担任と協力して温かく見つめる目を広げていきたい。

・省資源、省エネルギーの実践

予算の有効活用にもつながることである。無駄をなくし、ある物は大切に使用していきたい。全体の意識として物品の管理は一層の努力をしていきたい。

・報告、連絡、相談の実践

情報は重複してもかまわない。気付いた人が報告、連絡をするよう心がけていきたい。頼まれたことは、結果が出次第、報告するよう心がけていきたい。

